

あけのほし 2012年5月6日

## 「希望のある人生」

菊田 行住

正しい者も正しくない者もやがて復活するという希望を、神に対して抱いています。

(使徒言行録24章15節)

私は、首都圏の大都市である横浜から新居浜に来て、車の免許を取ることになりました。それで、松山の試験場に何度か通っている時、一人の青年に出会いました。彼は、難しい大型の免許を取得しているところでしたが、その他にも沢山の特殊な免許を、すでに取得していました。なぜ、そんなに多くの免許が必要なのかたずねてみると、今のトラック運送の仕事がとても割に合わないから、免許を多く取って少しでも待遇を良くしようと努力をしているのだということでした。夜中の勤務でも、夜間手当は付かないのだともらして、その姿勢は真剣そのものでした。

また、今治の自動車学校で、講習を受けていた時に、免許を取りに来ていた若い女性の会話を、何気なく聞きました。その内の一人は、なんとかこの4月に就職できたことを、大変喜んでいました。給料は決して良くはないが、正社員として仕事に就けたことが、どんなにありがたいことなのかを力説していました。

このようなことを聞き、大都市部よりも、大変厳しい雇用状況があるのだと知る事ができましたが、その厳しさは、日本全国に及んでいるようです。政府の調査では、ここ最近、自殺を考えたことのある人が増加しているとのことです。特に、前回の調査から20代の青年の増加率が激しいとありました。ここ一年の間に自殺を考えたことのある20代の女性は特に多く、44.4%にもおよんでいます。この数値の増加の背景には、正規の就職に就けないことかあり、たとえ正社員に就けたとしても、労働待遇が悪く、この先仕事を続けて行く希望を失ってしまっているとのことでした。

キリスト教は、このような先行きの希望が持ちにくい今の日本の状況に対して、どのようなことができるのかという問いが出て来ます。

キリスト教が、歴史の中に登場してきた時、その地域の労働状況、生活状況というのは、今以上に厳しいものがありました。それまで、家族を中心とした農業経営によって生計を立てていた人々は、社会の構造変化に伴い、貨幣経済の進展による大商業システムに組み込まれて行きました。家族と離れ、土地から切り離された多くの人々は、零細職人や商人、小作人として、あるいは奴隷となって、一つの労働力として生きて行かなくてはならなくなりました。家族から離れ、劣悪な労働条件の下、いくらでも交換可能な労働力として扱われました。現代のような人権の尊重という考え方がない当時においては、今以上にその個人の没落が容易に起こっていたのです。

そんな中で、キリスト教の教会が登場してきました。その中心的なことに、神さまはど

のような人も、等しく大切に扱ってくださっているのだという教えがあります。人間をいつでも交換可能な一つの労働力として見るのではなく、大切に神さまがお作りになって、大事に取り扱って下さっている一人の人間として見てくれているというものです。そして、その視点に立ち、互いの人格を尊重し、神の家族として共同体を形成したのが教会でした。そこでは、貧富の差や人種の違い、性別や社会的地位など、おりとあらゆる人間同士を隔てる壁が取り払われていました。神さまの慈しみ深い働きが、世界全体でその業を為しているのだということを受け入れ、そしてその視点に立って、お互いを大切に扱って行くことを決断した人々が集まったのがキリストの教会です。そこでは、具体的には、労働力としては成り立たなかった、病人、障がい者、児童、母子家庭など特に自立困難な人々を神の家族の一員として受け入れ、支えました。また、たとえ今は労働力として自立していた青年であっても、遠く家族から別れて都市で生活していた孤独さを癒すために、神の家族に加わることも多くありました。

これらの神の家族としての教会が、いかに当時の社会において必要とされていたのかは、容易に想像できることではないでしょうか。具体的な個人の生活を支援すると共に、精神的な心の平安を得ることが出来、そして将来への継続した関わりへの希望を持てたのが教会なのです。しかし、これらにもまして、人生の根底から人間を支え、生きる上での不安と恐怖を払拭したのが、死の克服の教えでした。将来の希望がもてずに、自殺を考えるその背後には、死への恐怖が存在しているのだと思います。一見矛盾しているように聞こえますが、人間の不安を突き詰めて行くと、自分の存在がなくなってしまうことへの恐れがあるのだということです。その終わりが、いつ来るかわからない極度の不安と恐怖に堪えきれず、逆に自分の手で人生を終わらせるというのが自殺の背後にはあるのではないのでしょうか。そうだとすれば、生活上の不安を根本から取り除くためには、この自分の存在を消去してしまう死への恐怖を克服するしかないことになります。イエス・キリストがもたらした新しい教えとその成し遂げた業は、神さまの慈しみは、人間の死を超えて、続いて行くものだということです。確かに人間は死にますが、そのまま捨ててしまうのではなく、死者の中から再び起こして、新しく御元で我々を生かしてくれるのが、本当の神さまの姿だということです。この新しい教えは、当時の人々だけではなく、現代の我々にも良い知らせとして聞こえてくるのではないのでしょうか。